





## 海という名の本屋が消えた（97）

平野義昌

### 元町駅周辺(3) 学校その3

神戸小学校校歌作詞者・若杉恵(さとし、1903～87年)は広島県安佐郡生まれ。1924(大正13)年県立広島師範学校(広島大学教育学部の前身)を卒業後、尋常高等小学校教師。26(大正15)年県立忠海高等女学校(県立忠海高等学校の前身)、27(昭和2)年から神戸小学校に勤務する。「駒四郎」「庭與吉」の名で文学活動。まだ「若杉慧」ではない。

若杉本人の神戸校校歌回想。〈私のつとめていた小学校が創立五十周年の記念事業の一つとして校歌をつくることになり、私が言いつけられた。半年かかってどうにか形ができた。東京に持って行って専門家に鑑定を乞うて来いと校長が言った。私はよろこんだ。(後略)〉<sup>註1</sup>

若杉は最初に中山校長の知人・葛原茲(しげる、詩人・童謡作家)に会うが、批評は全然頭に残っていない。次いで竹中郁の紹介状を持って北原白秋を訪問する。竹中は白秋の推薦によって詩壇に出た。<sup>補註1</sup>〈ルパンカ姿の白秋は、アル中(?)で慄える指に、私の持っていた4Bの鉛筆を握り、歌詞を全部平仮名に書きかえ、その文字を一つ一つおさえ、口ずさんでみたりして、それがまったくリズムカルでないことを遺憾とした。歌謡にする詩というものは、リズムと各節の照応がなくては、曲のつけようもなく、白秋先生にも手のつけようがなかったらしい。つまり私の半年の苦作は全然落第だったわけである。〉<sup>註1</sup>

若杉が東京行を喜んだ理由は島崎藤村(1872～1943年)訪問を目的としたからだ。約束なし、紹介状なしで押しかけた。

若き日若杉は深刻な悩み(性に関する身体現象)を抱え、胃も患っていた。25(大正14)年、休職して東京で治療を受けた。前年藤村の「海へ」を読み、心酔していた。13(大正2)年、藤村は姪との不倫問題から逃げるように渡仏、その紀行文である。18(大正7)年には姪との関係を小説「新生」で明らかにした。生きる苦悩と自らの弱さを小説にした。若杉も我が身を嘆きながら、生きたい、と切実に願っていた。回復の望みなく、帰郷する前に家だけでも見たい、と周辺を徘徊した。藤村に会う夢を何度も見た。写真で目にした字を真似し、書斎を同じようにしつらえ、簡素な生活を見習った。本の感想を書き送ると、返事が来て得意になった。自費出版本を恵贈したら礼状が届いた。

若杉訪問時、藤村は「中央公論」に長篇「夜明け前」を連載中だった。玄関で面談を断われた。10分15分でも、と校歌批評を口実に無理を言った。校歌について藤村の感想は覚えていない。というのは、帰り際に一筆所望したところ藤村にきっぱり拒絶されたからだ。強烈に打ちのめされた。〈私はひれ伏すような気持であった。私はどういふように玄関を出て、坂道をのぼって、木立を見下ろす砂利道をあるいて行ったか、十年の夢一時にさめた思いで、落葉の木立をすかした冬日の光りだけがいまも鮮やかである。〉<sup>註1</sup>

藤村はほとんどの訪問者を追い返していた、と知ったのは後のことだ。校歌誕生の裏には若杉の大きな失意があった。

若杉の神戸生活も悲しい始まりだった。〈任意に神戸の地をえらんで移住したわけではない。半ばは運命のたわむれにより、半ばは風

に吹かれるようにやって来たのだ。〉<sup>註2</sup>「運命のたわむれ、風に吹かれるように」とは、女学校同僚女性との恋愛問題だ。駆け落ち同然で相手の出身地・神戸に来了。28(昭和3)年、男子を授かり、結婚するも、すぐ妻は病死してしまう。若杉は、妻の一生を必ず書く、と決意した。<sup>補註2</sup>〈私のつとめた神戸市神戸区神戸小学校というのは県庁と向き合って、屋上運動場の上に山から海から一目にみえた。国鉄の高架線は工事に取りかかったばかりで、いまは元町駅になっている東の穴門筋の手前に街路からすこし登って旧三宮駅があり、そこに人力俵が幾台も並んで、客待ちのショウギ盤などをかかえていた。〉<sup>註2</sup>「県庁」は現在の兵庫県公館。学校の周りには中国人、台湾人が多く住んでいた。神戸校には西洋人ハーフの児童が数名、朝鮮人・台湾人児童が多数。彼らは日本人児童と比較して成績に優劣なく、卒業式で答辞・送辞を読む子もいた。若杉神戸校時代の卒業生に作家が2名いる。陳舜臣(1924～2015年)は1932(昭和7)年に諏訪山校から転校してきた。〈我が師は多すぎて、選ぶのが難しい。作家になっているのだから、その立場からいえば、小学校時代の恩師の若杉慧先生ということになる。と

いって、私は若杉先生から綴方を習ったのではない。小学校五年生の一年間、私たちのクラスは、若杉先生に「図画」を教わったのである。〉<sup>註3</sup>若杉は学級担任として普通教科を教え、高学年の図画を担当した。〈四年生まではクレヨンやクレパスで絵を描いていたが、五年生になると絵具を使う。若杉先生は絵具のしぼり方から、色の調合まで親切に教えてくださった。そのうちに、若杉先生が小説を書いているという噂がひろがり、私はひそかに尊敬したものだ。(中略)学問や技術をじかに教わることはないが、その存在そのものが私たちを鼓舞するという人がいる。あのころ、私は小説家になろうとは思っていないが、それはずなのに、若杉先生は私にとっては、まぶしく、そしてなんとなく同じ道にいる人だという気がした。当時の先生は線が細く、見るからに神経質そうで、近づき難いかんじがした。〉<sup>註3</sup>

1961(昭和36)年、陳は江戸川乱歩賞を受賞し、若杉と再会する。若杉は陳の記憶を述べたが、他の生徒と混同している部分もあった。陳が若杉を訪問すると、書庫に陳が献呈した本があり、朱線が引かれていた。〈教員室に呼ばれた生徒のように、私はかしこまって先生のお説教をきいた。(中略)文章を書くとき若杉の赤鉛筆を念頭に置いた。ありがたい無言の批評である。〉<sup>註3</sup>

若杉が陳に神戸校時代の自慢を語る。「いやあ、島尾くんの記事に手を入れたよ」(註3)。島尾敏雄(1917～86年)のことだ。

戦後、島尾が文壇に出て以来、若杉は注目し作品を読んでた。島尾に会いたくなった。ドストエフスキー『白痴』を探していたが手に入らず、彼なら持っているかもしれない、と借用を訪問の口実にした。神戸校の教え子と気づいていない。島尾は神戸市灘区在住、若杉も埼玉県と神戸を行ったり来たりの生活だった。島尾が「先生」と呼び、神戸校卒業生であること、綴方添削のことを伝える。〈昭和五年だったと思う(引用者註、4年の間違い)、天皇陛下が関西においでになったとき兵庫県

では私の勤めていた小学校に、当時のことばでいえば勅使を差遣されて、授業を見てもらったが、講堂には特別製の金屏風を立てめぐらして児童の成績品をかかげ、「天覧」に供した。綴方と書方は私が選んで指導したので、そのとき島尾の綴方を採用したというわけである。題も内容もむろん私はおぼえていない。(後略)〉<sup>註1</sup>

本を借りた。島尾との交流が始まり、同人誌「VIKING」の例会にも顔を出した。その縁で久坂葉子を指導した。64(昭和39)年島尾夫妻と九州を旅行した際、鹿児島新聞社の依頼で対談。島尾は若杉の教師時代を語った。〈私の歩きぶり、着ていた事務服の地色や柄までもおぼえているのには恐れ入った。オシャレの私は、普通のでなしに別荘立のセル地のを着ていた。(夜泥棒が入って職員室から私のだけ持って行かれたが)。それから私が校友会誌に出した短篇小説(?)までも(むろん彼は卒業してからそれを読んだのだが)をおぼえてくれたのは、おどろきもし、うれしくもあった。私はすっかり忘れていたからである。〉<sup>註1</sup>

神戸校90年記念文集(註4)に後輩教師・松本一男が若杉について書いている。文集発刊前には同校校長を勤め、神戸市教育委員・白川渥(あつし、1907～86年、補註3)と思い出話をした、と言う。戦前、白川は兵庫県視学委員(学校視察、教育指導、教員任免などを担当する行政官)の職にあった。若杉は文学仲間だが、職制無頓着。白川曰く、「平教員から君づけで呼ばれたのは初めてだ」。<sup>註4</sup>

補註1 竹中は神戸二中在学中に白秋・山田耕筰主宰「詩と音楽」(アルス、1922～23年)に投稿。23(大正12)年新年号の「新進11人集」に推薦された。27(昭和2)年上京し、白秋主宰「近代風景」(アルス)の編集を手伝う。若杉と竹中のなれそめは不明だが、32(昭和7)年12月竹中の『象牙海岸』(第一書房)出版記念会に出席(会場、栄町通5丁目「アサヒ食堂」。詩友他、東京から堀辰雄)。その後、共に同人誌「内部」「風神」に参加。補註2 54(昭和29)年、「愛の静脈」(『婦人倶楽部』連載、翌年単行本、共に講談社)。補註3 白川渥、本名・正美。小説家。東京高等師範卒、教員を経て、県視学委員、国民学校校長。40(昭和15)年「崖」で第12回芥川賞候補。註1 若杉慧『半眼抄』木耳社 1972年

註2 若杉慧『須磨・明石・六甲の旅』秋元書房 1961年  
註3 陳舜臣『神戸 わがふるさと』講談社文庫 2007年  
註4 神戸小学校同窓会編・発行『神戸校九十年 神戸小学校開校九十年記念文集』1974年  
写真 神戸小学校校歌の碑

その他参考文献・資料 ●Web「広島文学資料室」  
●若杉慧『老幼夢幻』言談社1985年 ●季村敏夫『窓の微風 モダンズム詩断層』みずのわ出版 2010年  
引用文は適宜新字・新仮名遣いに改めた。



神戸校校歌

# みなとMOIOMACHケンチクさんぽ vol.5

公益社団法人 日本建築家協会 近畿支部  
兵庫地域会 地域まちづくり委員会

## 空間資源としての古ビル

### 神戸と横浜の事例から考える

近年、戦後から70年代前半にかけて建設された都心に立地する築年数の古いオフィスビル(以下、古ビルと略す)の活用が、アーティストやクリエイターを中心に注目されています。「交通の便が良い」「家賃が安い」など利便性や経済性が、小規模な事業経営に有益であるだけでなく、DIYやリノベーションによる修繕が施されたビルの纏う趣きへの関心が少なからずあるようです。

また、私も含め、建設当時の時代を伝えるビルの佇まいに愛着を感じる人々も多く、『月刊ビル』(2010-)や『名古屋渋ビル手帖』(2013-)等の古ビルを特集する出版物※1からも動向を確認することができます。

そこで今号では、現在、横浜都心部の創造産業(アーティストやクリエイター等の新たな価値や文化を創造する業種)について調査研究している筆者が、乙仲通界限を訪れた記憶を振り返りつつ、横浜の活用事例と共に、空間資源としての古ビルについて考えてみたいと思います。

まず、振り返ると、私が乙仲通界限に関心を寄せるきっかけになった調査の一つに、



個性的な商店が入居する古ビル (神戸・乙仲通界限)



創造産業の活動拠点として再生された古ビル (横浜・関内)

.....

そして現在、こういった防火帯建築などの古ビルに、アーティストやクリエイターだけでなく、それらの枠には収まらない多様な人材が入居しており、個性的な界限が生まれています。

以上を踏まえて、乙仲通界限の商業空間と横浜の関内・関外地区のアーティストやクリエイターの活動拠点は、経緯は異なりますが古ビルを空間資源として活用することで、個性的な界限を形成したと言えるでしょう。

本来、建物は老朽化と共に建築的価値が減少し、そういった建物が集積している地域は再開発の対象となりやすいかもしれませんが、また、界限が市場価値を持つと、大規模な建物改修による家賃の向上や大型チェーン店の参入で、小さな商いや文化的な活動が逆に行い難くなってしまうかもしれません。

『乙仲通界限デザインワークショップ「乙仲さんぽ」』(2015-2017)でおこなわれた街並み調査があります。

調査を通して、取り分け興味をもったのは、街路にあふれだした商店の立看板が連なる独特の景観や、商業用途に転用された古ビルの使われ方についてです。

個人経営の個性的なカフェ、雑貨小物、服飾、家具などの商店やギャラリー等が、収益を主な目的とした商業空間とはやや趣きを異にする、趣味とも判別がつかない豊かな営みを実現していたことがとても印象的でした。

また、先述した創造産業に属する建築設計事務所やデザイン事務所もみられ、それらが混在している状況が乙仲通界限の雰囲気より魅力的に感じました。

乙仲通界限がそうした小さな商いの苗床となった背景には、乙仲業務の減少などにより、当初の目的で使われなくなった古ビルが集積していたことや、元町商店街から少し離れた位置にあり、既存の商売とは少し違う経済モデルを考えることができたと推察しています。

つまり、乙仲通界限が商業空間として奏功したのは、店主らがかつて乙仲業者で賑わっ

ていたオフィスビル街を意識的か無意識的か、地域の空間資源として活用したことにあると考えています。そのような事例は、筆者の知る限り、あまり見受けられませんが、横浜では関内・関外地区に、類似の活用事例を見出すことができます。

横浜시는神戸市と同様に、行政による事業の一環として、文化芸術活動の支援や創造産業の誘致などのまちづくりを行っています。そういった事業の一つである芸術不動産事業は、横浜都心部(関内・関外地区)の古ビルのオーナーと協働し、アーティストやクリエイターなどの創造産業の活動拠点を創出し、既成市街地の活性化や創造産業を中心とした界限の形成を進めています。

このような試みが生まれた背景には、2000年代前半にオフィスビルの空室率が高まったことや老朽化の進行、歴史的建造物等の消失、業務・商業機能の衰退が危惧された状況があります。

これに対して、横浜시는文化芸術による創造都市施策を推進し、歴史的建造物の活用だけでなく、古ビルなどの不動産ストックの活用に取り組んでいます。特に、横浜固有の戦後建築遺産と言える防火帯建築※2の活用を積極的に行っています。

なっていたらと思うと心苦しくもあります。

今後も神戸の調査を継続しますので、機会があれば、横浜の調査も含めて進捗を報告させていただきます。いただければ幸いです。

※1 古ビルを特集する出版物について  
2010年以降に出版された古ビルを特集する写真集や雑誌は、著者らが街歩きを通して再発見し、ビルの佇まいを語る内容がみられる。「渋ビル」「いいビル」など、より愛着ある表現が用いられていることが特徴である。

※2 防火帯建築とは  
戦後、都市火災での延焼を防ぐ目的で設けられた防火建築帯を示す。関内・関外地区では、通称として「防火帯建築」と呼ばれる。鉄筋コンクリート造で3階から4階建て、中庭型の配置やモダンな外観など、共通した形式がみられる。



鈴木 亮太 (すずきりょうた)

関東学院大学 人間共生学部助手  
／横浜市立大学大学院 都市社会文化研究科 博士後期課程／専攻分野 建築・都市デザイン